



令和六年 名月管絃祭

令和六年九月十七日（火）午後五時半より

賀茂御祖神社（下鴨神社）

令和六年 名月管絃祭 奉納演目

一、尺八 新都山流 奉仕

本曲「懐月調」(こうげつちよう)

流祖 中尾都山 作曲
冴えわたる秋の月を仰ぎ、胸中の嘆きを感情のおもむくままに表現している。月の出る前の静寂な境地、やがて中央に昇った月にうったえる悲痛な嘆き、残月に胸せまり消え入るような思いをそれぞれ表現した変化に富んだ曲となっている。

本曲「湖上の月」(こじょうのつき)

流祖 中尾都山 作曲
さわやかな秋の空に冴えわたる月が、湖の小波を照らして、金波銀波を漂わせる情景を表現した二部合奏曲である。本曲で三拍子が用いられたのは、この曲がはじめてである。

一、管絃 平安雅楽会 奉仕

「越殿楽」(えてんらく)

「陪臚」(ばいろ)

雅楽では、音楽のみ演奏するのを管絃と称し、舞のともなうものを舞楽と呼んでいる。楽器の編成は、打楽器は鞆鼓、太鼓、鉦鼓、絃楽器は琵琶、箏、管楽器は、笙、篳篥、龍笛で構成されている。本年は管絃曲のうちよく親しまれている越殿楽、軽快な陪臚を演奏する。

一、箏曲 琴綾会 錦社中 奉仕

「夏の唱歌メドレー」ふるさと・たなばたさま・花火・宵待草

夏の唱歌と童謡を箏の三重奏のメドレーで演奏。

「蒼月歌」 八木節のテーマにのせて

大平光美 編曲
群馬・栃木県の民謡「八木節」、深い青色の空・満月・遠い昔の夜祭りの記憶・・・そんなイメージをリズムカルにドラマチックにアレンジされている。

一、筑前琵琶 旭城会京都 奉仕

「京洛の花」(きょうらくのはな)

京都の四季を愛でる曲で、葵祭、高尾の紅葉や金閣寺や銀閣寺などの京の風物詩や名所が謡われている。

「熊谷と敦盛」(くまがいとあつもり)

平家物語の一の谷の合戦。源氏の源義経が鶴越で一の谷に攻め入った。敗れた平家の人々は、多くの諸将の命を失い、また船に乗って逃げようとした。先陣を果たした熊谷次郎直実は、敵を追って波打ち際まで馬で来た時、一人の武者が馬を泳がせてはるか沖の船に向かっていた。その武者に「大將軍と見参らせ候え。敵に背中を見せるとは卑怯なり」と直実が声を掛け、組み付き戦い、首をかき切ろうと顔を見ると、わずかに十六歳の少年。直実は、この武者一人討ったところで戦勝に障りがあるまいと、逃げのびさせようと思つた。しかしその時、背後には五十騎ほどの源氏の軍勢が迫っていた。同じ討たれるのであれば、自分の手で討ち供養しよう、首をかき切り、鎧直垂を解いてみると、錦の袋に包まれた笛が出てきた。その武者は、笛の名手、平敦盛であった。

一、箏曲 琴綾会 錦社中 奉仕

「青のすみか」TVアニメ「呪術廻戦」壊玉・玉折テーマ曲

キタニタツヤ 作曲
呪術廻戦はダークファンタジーで重いテーマを扱っていることから、この曲は「青春時代特有の別れ」をコンセプトに作曲された。箏の三重奏のアレンジで演奏。

「第九」

ベートーベンの九番目の交響曲の第四楽章には、シラーの詞による合唱が取り入れられており、「人類愛」という理念が力強く表現されている。これは、その楽章からの抜粋を箏で合奏。

一、舞樂 平安雅樂會 奉仕

「振鉾三節」(えんぶさんせつ)

舞樂會の始めに舞台を清める御祓いの意味を持っている。

第一節では左方の舞人が天の神に祈る。第二節では右方の舞人が地の神に祈る。第三節は左方、右方の舞人が揃って登場し、一・二節と同じ舞を舞う。これは先靈を祭るためである。

「蘇利古」(そりこ)

別名を「竈祭舞」(かまどまつりまい)とも言われ、一説には応神天皇の時代(二七〇年頃)に酒造りを専門とした百濟人の須々許理(すすりこ)がもたらしたともいわれている。舞人は雑面(ぞうめん)をつけ、白楚(ずばえ)とよばれる短い棒を持って舞われる。

「蘭陵王」(らんりょうおう)

中国大陸から伝来した舞で古代中国北斎の將軍、蘭陵王長恭は容姿が非常に美しかったため、戦場に赴く時はいかめしい仮面をつけて戦鬪に臨み、多くの武勲をたてた。人々は喜び祝ってこの舞を舞ったと伝えられている。尚、日本の切手にもなった代表的な舞樂。